

沖縄における屋取集落の研究と課題

田 里 友 哲

一、屋取の語義とその概念

沖縄の集落は発生的に見て、在来伝統の「古村」^①と、凡そ一七〇〇年頃の近世期に起源をもつ「新村」^②に大別して考察することができる。筆者はこれまで後者の新村落について興味をもち、研究をつづけて来たので、本稿ではその中で、異色の集落性格を有する「屋取集落」^③について報告しておきたい。

「屋取」の語義^④は、ヤドリ即ち宿するということで、貧乏士族、零落士族が田舎下りをして、暫く農家に身を寄せ、其処に宿ったことから来たものである。

凡そ二五〇年前からこの貧乏・零落士族やその二・三男は往時の政治・経済・文化の中心地域である首里・那覇から、沖縄島の農村地域へ人口移動の余儀なきに至った。その発生の要因については後述するが、旧士族（俗には良人^{ゆめつちび}と言う）^⑤の帰農現象が顕著な事象として展開している。

これらの士族達は一時的仮居、仮住いの佻しい生活から、いずれは再起して、元の中心地域で、一旗あげたいとい

う信念は固かったが、時世の流れは却って帰農現象が顕現し、遂には定着同化して集落化が進み、所謂屋取集落と称する異色の集落形成を見るに至ったのである。

屋取現象はこれまで首里・那覇に集居せしめられて居た旧土族達が、官職・采地の欠乏に対応して、新しい生活手段を獲得しようとする人間活動の姿ではあるが、特殊階級の土族から帰農するのであるから、その筋目を立て、節儀を大切にすることは、心理的にも極めて難事であつたろうと思われる。

而も居住先の本村の荒蕪地、荒欠地の一部を譲りうけるか或は「叶掛け」^⑥と呼ぶ小作をするかして帰農するのであるから、決して容易なことではない。土族意識も残り、出身地への復帰意識も強く、自尊心も強かった。従つて土地の百姓達とは対立意識があり、定着同化するにはかなり時間を要したのである。

これらの土族帰農者を居住人^⑦と呼び、土地の百姓即ち地人^⑧とは区別されていた。

明治三十六年土地整理事業が終了すると、土地私有制の実施に伴つて、規模の大きい屋取集落は次第に行政的単位村(字のこと)として独立し、村落の発達を見るに至つた。

ともあれ「屋取集落」とは、近世期の沖縄における土族帰農による人口移動の所産として形成された開拓村落の性格をもつ新しい集落と規定することができる。

在来伝統の「古村」即ち平民百姓村^⑨に対し、土族帰農の「新村」として顕著な特色を有している。本稿では在来の古村と屋取集落を比較しつつ考察することにした。

尚この屋取集落は沖縄本島とその周辺離島に限る現象で、宮古諸島、八重山諸島の類似現象は別の視点で考察する必要があるため、本稿では取りあげないことにする。

二、屋取集落の分布の態容

a、分布 屋取集落の概念は沖縄本島とその周辺における土族婦農によって発生する集落現象であるから、当然その分布は該地域に限られるわけである。明治三十三年末の沖縄県統計書^⑥から、土族人口比率を算出し、それに基いて土族人口比率による第1図の分布図を作成すると、一見してその分布の態容が看取される。

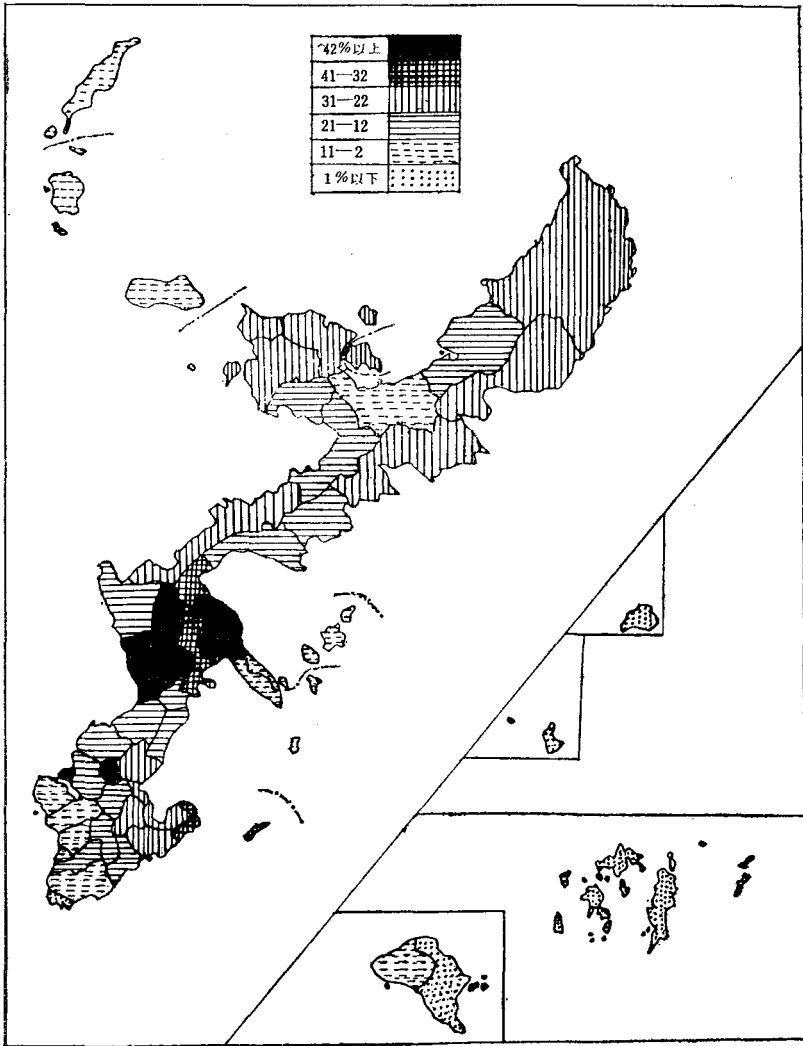
土族人口比率が平均値以上の間切（今の村のこと）を挙げると、中頭郡の北谷（現嘉手納村を含む）・具志川・越來（現コザ市）・美里（石川市を含む）の四間切と、国頭郡の本部・久志・恩納の三間切及び島尻郡の知念・真和志（現那覇市に合併）・大里（与那原町を含む）の三間切で、以上の十間切が最も卓越して居り、典型的な屋取集落の核心地域を形成している。

沖縄本島の行政村落数は、一九五八年の筆者の調査^⑦では六〇〇であるが、うち一六九の村落は、一七一三年以降今日までに新設されたもので、更にそのうち中頭郡の六三、国頭郡の三九、島尻郡の三七、計一三九の村落が屋取集落から発達したものである。凡そ二三％強の村落が屋取起源の新村ということになる。

石川・仲泊の地峡部を境として、北部地区（国頭郡）と中・南部（中頭郡島尻郡）地区は、自然的条件から見て、極めて明瞭な地域差があるが、集落分布の態容も地域差が顕著である。

北部地区は国頭胴体部の東海岸と西海岸、および本部半島に細分して考察すると、

(1)東海岸と西海岸は地形の關係から全く類似の分布で、臨海性で、砂浜海岸か湾奥の狭い沖積地を選んで立地することは共通している。古村が海岸の良位置を占拠するので、屋取集落の新村は、残された海岸位置の狭隘な空間に限



第1図 土族人口比率による分布図

られるから、如何にも素朴な様相の小村落の形態が点々としてゐる。海岸位置の屋取は地形の制約で発達が遅れているが、内陸部の台地面（上原と呼ぶ）に分布する屋取は、近年山地開発などで活気を呈するようになった。

(2) 本部半島は地質・地形の条件が複雑のため、集落分布の態容は立地の諸条件が反映して、きわめて変化に富んでいる。三〇〇米附近の高距位置から、古生代石灰岩の台地、国頭礫層台地、琉球石灰岩台地、海岸の砂浜地迄各種の地形を選んで、新古の集落が広く分布している。本部間切の石灰岩台地にはかつて桃原屋取として知られた典型的な屋取集落があり、伊豆味の山間盆地にも面白い屋取集落が見られる。

中・南部地区は地形・土質など多少の相違はあつても、北部地区に比べて低平地が多いから、集落分布の態容は、琉球石灰岩台地、島尻層泥灰岩の台地、低地、海岸の沖積低地といずれも均等に一樣に集落配置が見られ、北部の沿海性の偏在する分布に対して、中・南部は全域的な一様の分布態容が特色である。この地域でも屋取集落の分布は古村との交渉関係からして、その周辺に発生し、分布するのは当然である。

今日東洋一と言われる嘉手納基地の一带は北谷間切の屋取の卓越地域であつたが今はすっかり変容して居り、越来間切も同様である。北方の具志川間切がかつての屋取現象を究明するのに好適な地域として残されて居ることは極めて意義深いものがある。筆者はこの具志川間切の屋取集落については、既に発表した^⑩が、その他美里・読谷・中城・宜野湾、南部地区の大里・佐敷・知念・玉城間切には屋取集落の分布が卓越して、集落形態、規模、屋敷林の繁茂の状態などから、在来の古村との区別が容易である。

狭隘な離島社会の沖縄島に、近世期の史的経済・社会・文化的・政治的諸相を投影して、そこに古村と新村が対照的に展開する分布の態容は、人間活動の空間的表現として興味深い。

b、立地 屋取集落は耕地立地をすることが一つの特色である。古村の百姓地（御授け地とも言う）即ち地割地内に荒蕪地・荒欠地が生ずると、百姓村では土地の耕耘について苦慮せねばならなかった。地割制下の地人（土着の百姓）達は、貢租負担力の均衡維持に四苦八苦する関係から、その対策として、この荒蕪地・荒欠地を居住人（土族の寄留者）に、耕作を譲ったり、「叶掛け」（小作のこと）して、対応しようとした。又間切によっては民力疲弊し、広い百姓地をもてあまし、中央政府に返納する土地即ち「請地」や、御手入処分にあつた土地「払請地」などに居住人を入植せしめた。中頭郡の具志川間切では「払請地」に首里・那覇・久米等に広く移住民募集までしたと言われている^⑧。

かように居住人即ち屋取人は百姓地の荒蕪地・荒欠地や請地・払請地の開墾耕作に従事するのであるから、その耕地内に宅地を構えることになる。このような畑屋式（畑のことをハルという）の宅地が、古村から遠く離れてその周囲に点々と散在して立地する。

水と集落の立地・分布の關係が密接である^⑨ことは原則的であるが、屋取集落の場合はそれは二次的にならざるを得ない。それは耕地立地をする立前から耕地の入手、確保が前になる。そのことは集落の景観、形態によく現われている。

次に集落の立地位置を高距別に検討しよう。沖縄は亜熱帯気候地域であるから、地形的条件が許せば、かなり高位置に集落立地が見られても不思議ではない。が意外に低位置の立地であることに驚くのである。

沖繩島の脊梁山地も約五百米で、それ程高いこともないが、在来の古村では百五十米位の台地に立地するのが高位置の集落で、それ以下に限られている。本部半島の山地部で、図上でも判読できるが、百五十米以上の高位置に点在

する集落が散見される。これは未独立の屋取集落である。

第1表 高距別の集落位置

	島尻	中頭	国頭	離島	計
20米以下	11	21	12	6	50
20—40	6	7	4	2	19
40—60	3	6	8	1	18
60—80	8	15	6		29
80—100	1	4	3		8
100—120		7	2		9
120—140		3			3
140—160	2	1			3
計	31	64	35	9	139

高度の割に集落の立地が低位置を占めていることは地形条件の制約である。長い河川らしい河川もなく、平野らしいものも乏しく、山地、台地、低地の傾斜が強く、集落位置が二、三の例外を除くと殆ど一五〇米以下の低地台地に立地するのである。それは古村も新村も同様である。

第1表は屋取起源の行政的単位村(字)について、地形図から高距別に集落位置を見たものである。二十米以下の沖積低地と六十から八十米の琉球石灰岩の台地、島尻層泥灰岩の台地が集落位置の中心になっていることを示している。

c、形態 屋取集落の景観は在来の古村に比べて、散居形態をとるので特色がある。耕地立地を立前とするから当然のことであるが、古村が凡て集村形態であるのに対し、屋取集落の散村形態は多様である。孤立状のもの、点状のもの、線状に寄合うもの、凝集する小村落、血縁的な集団、地縁的な寄合等、多様の散在する集落が屋取集落の景観の特色と言える。古村と新村は形態上から最も区別し易い。

中頭郡の具志川村字西原の宅地密度について、矢嶋博士^⑤の方法で求めたのが第2表である。一見して判るように、孤立荘宅が四七%もあり、二戸、三戸、四戸、五戸までの密集を見ると九〇%以上にもなるので、散居形態は極めて明瞭である。

第2表 具志川村字西原小字別の宅地密集度 (1958年)

宅地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10戸
伊集久原	19	2	2	2	1					
西原	8	1								
ブリク原	18	3	1	1						
獅子山原	7	4	2							
茱嘉原	3									1
計	55	10	5	3	1					1
戸数	55	20	15	12	5					10
比率%	47.0	17.0	12.8	10.3	4.3					8.6

中・南部に発達する石灰岩台地と島尻層泥灰岩地帯では、起伏する地形に依りて、耕地割も不整然とするから、道路網や宅地の配置も不整然とした散居景觀を呈するのである。

それに入植の新しさ等もあって、屋敷林や石垣、生垣なども古村に比して粗末である。

集落規模について見ると、沖縄本島の全行政区(字)、都市地区も含めて、その戸数別に四つに大別すると以下のようなになる。

特大(三〇〇戸以上) 大(二〇一—三〇〇) 中(二〇〇—一〇一) 小(一〇〇以下) とすると、小が二五〇でもっとも多く、次は中の二一九、特大の一三九、大の八六という順になり、六六%が二〇〇戸以下の行政区ということになる。これを屋敷起源の村落について見ると、特大五、大一、中四二、小八一となり、二〇〇戸以下の行政村落が凡そ九〇%を占めることになる。これは集落形成の新しさを意味している。五〇戸以下では基礎単位としては殆ど未独立であるが、現在この段階の屋敷はかなり存在する。

三、屋敷集落の形成

a、発生とその背景 一七三二年に首里王府の三司官(宰相のこと)で、天

才政治家と称された具志頭親方（蔡温^{さいおん}）は、御「教条」^⑧を發布して住民に教訓を垂れている。

それは蔡温が三司官に就任して五年目で、いわば当時の国民読本とも称すべき性質のものであるが、往時の社会背景から、その必然性を持つものと思考する。

特に士族の職分について、「御当国役座之儀数少有之諸士之儀者年増致繁榮候ニ付而其内御奉公不仕方茂余多可罷在候 然共士与申者其筋目百姓与拔群相替候 右之訳ヲ以テ常々忠義之心題目ニ存国土風俗之為何篇氣ヲ附神妙ニ相勤候ハ、是又御奉公之筋不輕勤ニ候 何連茂存知之通風俗悪敷罷成候ハ、各子孫モ悪敷相成候儀案中之事候 能々此了簡ヲ以テ士之節義大切ニ存万端正道ニ可致執行事」以上のように申述べている。

先に尚真時代に中央集権が確立し、士族筋目の者は大方首里・那覇に集居したわけであるが、爾来年々歳々繁榮する士族の増加に対し、官職、采地の不足は目立ち、役職に就けない士族が増えて、其の節儀を大切にせず、風俗も悪くなって来たため、とくに士族は百姓と抜群に相替る者であるから、其の筋目を立てて節儀を大切にするように教訓したわけである。

当時の中心地域である首里・那覇の貧窮士族や下級士族の失業対策、授産事業は社会問題となり、中央政府の最も腐心するところであったが、その窮余策として、一七二五年に貧士の転職許可を認めるようになり、次第に士族帰農を慫慂するに至ったのである。

蔡温は更に「独物語」^⑨において、政道の本筋について、その手段の前後をあやまらなければ、二十万の人口が、三、四十万になっても困ることは当時既に人口問題が社会問題にまでなつて居たと見ることができよう。

蔡温の政治は凡ての面に積極策をとり、首里王府の黄金時代を築いた偉大な功績はさることながら、士族帰農の奨

励には困窮せざるを得なかったことと思われる。とまれ士族帰農による人口移動の所産としての屋取集落の発生はこのような史的・社会的背景の中に起源するのである。

発生・発達の時期的については、その的確な資料を欠くが、凡そ四つの時期に分けて考察することができる。

第一期 尚敬王代（一七一三—一七五二）を中心とする前後の一〇〇年

第二期 尚温王代（一七九五—一八〇二）以降廢藩置県（一八七九）迄

第三期 廢藩置県後土地整理（一九〇三）迄

第四期 土地整理以降

以上であるが、第一期は創成期である。士族筋目の二・三男対策と見られるが、一七二五年の貧士の転職許可、一七三〇年の転職の奨励はこのことを証している。筆者の調査で八代祖先の草分けが古い方であるが、それはこの時期のものと考えられる。

第二期は屋取現象が一般化する段階で、初期の帰農者がようやく定着し、自主的移住者が続出する機運が醸成された頃である。隆盛期と言えよう。六代・五代祖先の草分けはこれに該当する。

第三期は旧藩体制の崩壊により、これまで特権階級に属して居た士族は、好むと好まざるとに拘らず、新しい生活への途に苦慮せねばならなかった。所謂廢藩士族の現出、その凋落振りは実にあわれで、深刻な社会問題となったのである。知人を頼り、知己を尋ね、或は一家をあげて、全島域に屋取集落の発達を推進するに至ったのである。

第四期は発達期で、屋取から行政的単位村として独立するものこの時期で、地割時代から土地私有時代へと、沖繩の新時代の到来を意味する。

b、村落形成の過程とその類型

屋取集落の形成過程は、人口の移動（首里・那覇の土族）——↓集落の発生（在来

古村の地籍内に仮居）——↓集落の農村化（定着居住）——↓集落の発達（行政的単位村）の如き過程を迎るが、沖繩島の六〇〇の行政落数のうち一三九が屋取起源の村落である。今日尚、屋取の小村落の段階で未独立のものもかなり多く存在している。

屋取集落は形成過程、移住の形態などから次の三つの類型が見られる。

- (1) 独立屋取型
- (2) 共存屋取型
- (3) 従属屋取型

以上の三つの類型に大別して、それぞれの特徴について要約すると、

(1) 独立屋取型 単数又は複数の本村（古村）の界内に、本村から分離し、孤立して移住したもので、屋取集落の典型的なもの殆どこれに属する。既に行政的単位村として独立したものが多し。北谷間切、具志川間切等土族人口比率の高かった地域では本村を凌いで発展したものもある。

(2) 共存屋取型 本村の位置の移動や、民力の衰退から、多くの屋取人を居住せしめて、本村と屋取が共存して一つの行政的単位村を構成するもので、その数は少ないが、両者の同化、一体化がすすみ、独立屋取に見られる本村対屋取の対立意識、土族対百姓の対立意識もなく農村化がすすんでいる。本部間切伊豆味村落や金武間切宜野座村落などが好例である。

(3) 従属屋取型 屋取の初期的段階のもので、移住の時期が新しいことや、移住地の地形条件の制約などから、未だ

小村落のまま、本村の籍内に従属的に移住するもので、何々屋取と呼称するものばすべてこの類型のものである。その数も多く分布も広い。

四、屋取集落の内部構造

a、本村と屋取の交渉関係　　屋取集落は本村即ち在来の古村（平民百姓村）の属地内に移住し、開墾を始めることによって成立形成される。そこで在来の古村とは土地を紐帯とする地縁的結合関係が生じてくるが、その共同体的な結びつきは極めて弱く、形式的で却って対立意識が強かった。新田集落が親村の枝村・子村として密接な関係のあることとは著しく相違している。

在来の古村には「お嶽」「ノロ」「根神」等の村落共同体の紐帯があつて、平民百姓村としての伝統性を強く保持しているが、屋取集落にはこのような村落共同体の紐帯は殆ど皆無である。

かつての階級制度の行きがかりから、特権意識をもつ士族達は、たとえ今は零落していても、いずれは再起して一旗あげたいという信念は固いから、地人と同化融合せず、自尊心を持ち、独立不羈の節儀を守り、士族意識を強く残していた。

又地人達もこのような士族の態度には、至極冷淡であつた。どのように威張つて見ても、所詮は自分等の死活の問題であり、農業に励む以外に途はないではないか。ことに廃藩士族の凋落振りはあわれであつたからである。

このような対立意識は通婚関係にも顕著に見られた。古村では貢租に対応するための人口の均衡維持の関係から、農民の移動も禁じられていたので、婚姻も村内婚が多かつた。今でこそ相互間の通婚も見られるが、戦前までは皆無

に等しい状態であった。

第3表 伊本部間切伊豆味の姓氏別調（一九六二年調）

伊野波	伊良波	嘉味田	久場	比嘉	大田	渡慶次	豊里	山里	饒平名	平安山	宮城	名城	座間味	仲原	徳村	宮里	前川	
毛	乳	向	葉	茄	阿	廈氏(薛氏)	卓	敖	衛	柏	張	東	吳	長	東	東	阿	
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	
盛	幸	朝	兼	知	守	道(賀)	友	将	知	麗	政	宗	英	政	政	守	守	
二七	二二	一一	一〇	八	八	七	七	七	六	五	五	五	五	五	四	四	三	
六(八)	五	五	四	三	四	四	不	四	五	不	五	三	三	四	五	三	不	
首里	那覇	首里	首里	首里	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	首里	
喜納	又志堅	又吉	佐久川	山田	稲田	嶺	養	雍	趙	錢	蒙	文	倪	毛	中	貝	養	
蔡	雍	方	松	容	翁	翁	養	雍	趙	錢	蒙	文	倪	毛	中	貝	養	
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	
政	興	全	紀	義	盛	政	興	宗	直	宗	孝	宗	安	秀	唯	政	昌	
三	三	三	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	一
不	三	二	不	四	不	三	三	三	三	三	不	不	不	二	一	二	三	三
久米	泊	那覇	那覇	泊	那覇	泊	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇	那覇

(計一七三戸)

高山(一) 鳥袋(一〇) 照屋(八) 兼次(六) 荻堂(六) 西銘(五) 饒波(五) 小橋川(五) 前田(五) 玉城(五) 伊
 佐(五) 上村(運天)(五) 桃原(四) 岸本(四) 与那嶺(四) 渡久地(四) 志良堂(四) 安田(三) 仲宗根(三) 阿波根
 (三) 島田(三) 奥原(三) 大城(二) 上地(二) 仲田(二) 山城(二) 運天(二) 国場(二) 仲間(二) 城間(二) 上
 原(二) 古堅(二) 仲里(二) 田場(二) 当山(二) 与那城(二) 松田(二) 安里(二) 喜舎場(二) 神田(二) 天久(二)
 花城(二) 嘉陽(二) 仲本(二) 上里(二) 那覇(二) 新城(二) 泉(二) 当銘(二) 儀間(二) 屋富祖(二) 森松(二)
 名渡山(二) 下西(一)

(計一五三戸)

b、姓氏別構成

一六八九年に系図座が創設されて、士族はそれぞれ家譜が編修されたので、それをもつ者を系持けいもちと称し、持たない百姓は無系と呼ばれた。家譜の編修と共に諸士には姓が定められ、これを氏と称した。この姓には名乗なのもり(大和名ともいふ)と唐名かろみながつけられ、和漢両様の公称があるが、名乗の頭字即ち名乗頭は、その一族に固定しているので、姓よりは名乗頭を基にした方がその血統即ち姓氏を知るには甚だ都合がよい。

第3表はこのような関係から、本部間切伊豆味村落について調査した結果である。姓氏・出身地・入植代数の明確なものとは詳細に記してあるが、調査の困難なもの、不明なものは姓と戸数だけを列挙してある。伊豆味村落は共存屋取型の代表的な村落であるが、第3表でもそのことは推察できよう。一九六二年調査時の総戸数三二六戸の約五三%の一七三戸については士族系が明確になったが、残りについても子細に調べると、系持、無系が判別すると思うが、ここでは姓の数の多いことに注目されたい。全部で九〇姓もある。

在来の古村では、極端に言えば美里間切山城村落の事例のように、村一姓で、同姓同族的なところもあるのであ

る。一般には幾つかの門中に分れて、その数が少なく、それに比べて屋取ではその数も多く、雑多なことが特色である。

c、土地所有の指向 初期の屋取人は土地保有についてはそれ程執着はなかったであろう。定着同化の意識より再起の念が強かったから自然の成行であるが、年々歳々増加する帰農者の繁栄は土地所有への指向を辿ることは必定である。

屋取人は屋取浮草とか屋取飛鳥などと言われた。屋取人が耕地条件のよい所を探し求めて、転々移動するからで、二重・三重の移動さえ見られる。帰農士族は免税免夫の特権が残っていたから、定着するまでには少しでも耕地条件のよいところを求めて転々したのである。定着の早かった者は入植地を根拠として土地取得、保有へと指向している。

百姓地の荒蕪地・荒欠地ができると、居住人に限らず、貧農も「叶掛け」小作をして、小作地を確保している。従って廢藩置県の頃には、このような小作地について法的问题が惹起され、当時の裁判係から田地方顧問に対して、旧藩制の取扱振は如何。⑩との質問に及んでいる。

ともあれ帰農、定着、同化、農村化と進むにつれて、土地保有、確保への指向は一層強くなり、家は粗末に建てても土地は広く取得したいと望んで居た。土地は金を儲けてくれるが家屋は利得にならない。家よりは土地という経済観念は屋取人にきわめて支配的となった。

明治三十六年の土地整理以後は、土地公有制から私有制に移行するので、屋取居住人は一層この執念を固持して、土地保有につとめて行った。

耕地立地を建前とする屋取集落は、居住する宅地に近接した耕地は次第に屋取人に保有されるようになった。このようにして屋取集落の耕地は屋敷の周囲に集団化するようになり、耕地と屋敷との距離はなくなり、村落機能を高め、屋取集落の発展の基礎が築かれて行った^⑧。

五、結びと課題

本稿では沖縄の集落研究の一環として、とくに近世期に成立形成された屋取集落と称する開拓村落の性格をもつ村落について、その概要を報告することを主眼としている。主題の屋取集落ということから、きわめて唐突の感を抱かれることと思うが、それは格別他意あつてのことではない。これまで報告が遅れたことと、沖縄の古代集落へのアプローチの多い割に、近世期のこの種の集落研究が、余り報告されなかつたからである。

私は沖縄の近世期の集落現象に関心をもち、これまで調査研究をつづけているが、ちょうどこの頃は異色ある地割土地制度が施行されていた時で集落現象との関連もなかなか興味深いものがある。従つて今後の私の集落研究の課題は、この地割制との関連に視点を置いて進めて行きたいと思つている。大方の御批判を期待し牛歩ではあるが研究深化を図りたい所存である。

参考文献

- ①② 拙著 沖縄における屋取集落の研究（第2報）（二九六四） 琉球大学文理学部紀要

- ③ 拙著 沖縄における屋取集落の研究(第1報) (一九六〇) 琉球大学文理学部紀要
- ④ 伊波普猷著 琉球古今記(一九二九)
- ⑤ 比嘉春潮著 沖縄の歴史(一九五九)
- ⑥ 伊波普猷著 前掲書(4)
- ⑦⑧ 比嘉春潮著 前掲書(5)
- ⑨ 仲松弥秀著 沖縄の集落 (一九六二) 琉球大学文理学部紀要
- ⑩ 赤嶺康成所蔵 沖縄県統計書(一九〇〇)
- ⑪⑫ 拙著 前掲書(3)
- ⑬ 伊波普猷著 前掲書(4)
- ⑭ 仲松弥秀著 集落地理講座3(一九五八)
- ⑮ 矢嶋仁吉著 集落地理学(一九五六)
- ⑯⑰ 沖縄歴史研究会 蔡温選集(一九六七)
- ⑱ 東恩納寛惇著 琉球の歴史(一九五七)
- ⑲ 小野武夫編 近世地方経済史料第十卷(一九五八)
- ⑳ 大田朝敷著 沖縄県政五十年(一九三二)